

日曜大殿説教

「信心をおこ発す」

平成二十年八月十七日(日)午前九時 於大本山増上寺大殿

天然寺住職 後藤 尚孝

「讃題」

くぐくも かくやあるらん あらたのし

とくまいらばや 南無阿弥陀仏

一、念仏往生と申すことは、弥陀の本願に、わが名号をとえんもの、わがくに生まれずといわば、正覚しやうがくをとらじとちかいて、すでに正覚をなり給えるがゆえに、この名号をとらうるものは、かならず往生する事をう。

念仏往生とは、阿弥陀様が「わが名号を称える者が、わが浄土に往生しないことがあれば、私は仏とならない」と本願に誓われ現に仏とられたのだから、阿弥陀さまの名号を称えるものは必ず往生が叶う、ということなのです。

二、このちかいをふかく信じて、乃至一念もうたがわざるものは、十人は十人ながら生まれ、百人は百人ながらうまる。念仏を修しゆすといえども、うたごう心あるものはうまれざるなり。

このお誓いをしっかりと信じ、たとえ一遍のお念仏であつても往生が叶うことに疑いを挟まない者は、十人いれば十人皆が往生し、百人いれば百人皆が往生するのです。たとえお念仏を称えたとしても、そのお誓いに疑いを懐く者は往生しないのです。

三、上人おほ仰せられて云わく、たとえばひが事こというものありて、あの池いけの蓮花れんげを、あれは蓮花れんげにあらず、梅うめぞ桜さくらぞといわんには、汝なはその定じやうに蓮花れんげにはあらざりける、誠に梅うめなり桜さくらなりと思わんずるか。

(随蓮房ずいれんぼうの見た夢の中で)法然上人ほつぜんが「例えば、道理に反することを唱える者がいて、あの池の蓮の花を指さし、『あれは蓮の花ではない。梅である、桜である』と言ったならば、あなたはその通りに、あれは蓮の花ではない、本当に梅である、桜である、と思ひますか」とおっしゃいました。

四、随蓮ずいれん申して云う、現げんに蓮花れんげにて候そつうわん物をばいかに人申すともいかでか信じ候べきと申すに、上人おほ曰く、念仏ねんぶつの義ぎ又また此こゝくの如ごとし。源空げんくう、汝なに念仏ねんぶつして往生じやうじやうする事は、疑ぎいなしといひしことを信しんじたるは、蓮花れんげを蓮花れんげと思わんがごとし。ふかく信じてとかくの沙汰さたに及およばず、只ただ念仏ねんぶつを申すべきなり。悪義あくぎ邪見じやけんの梅桜ばいおうを信しんずべからずと。

それに対して随蓮房ずいれんぼうが「今現げんに蓮の花であるものを、たとえ人がどのように言つたところで、どうしてそれを信しんずることがありましようか」と答こたえました。

すると法然上人ほつぜんは、次のようにおっしゃいました。「お念仏ねんぶつの教えもそのようなものです。私わが、源空げんくうが、あなたに『お念仏ねんぶつを称ほめえれば往生じやうじやうは疑ぎいない』と言いつたことを信しんじたのは、まさに、蓮の花をそのまま蓮の花と認知しんちするのと同じです。(一)のように、念仏ねんぶつ往生じやうじやうを深く信じて、他の人があれこれと言いうことに感知しんちせず、ひたすらお念仏ねんぶつを称ほめえるべきです。『あれは梅の花だ、桜の花だ』などと言いひ立てる悪あくしき教きやうえや邪よこしまな見解けんかいを信じてはなりません」と。

五、安樂房、上人に尋ね申して曰く。我等ごこときの輩ともがら、固く十重じゅうじゅうをもたもたず。

常に妄念をおこし、又勇猛精進ゆうめいしやうじんならずして、わが身の善悪もかえりみず、ただ阿弥陀の本願を仰ぎて、決定けつじやう往生の思いをなし侍るはなは、往生し侍るべしやと。

安樂房（遵西）が法然上人に尋ねました。「私どものような至らぬ身では、

十重禁戒じゅうじゅうきんがいをきちんと守ることもできません。常に妄念が沸き起り、又懸命に精進することもなく、自身の善悪を省みることもしせず、ただ阿弥陀さまの本願をたよりに必ず往生しようと願っているだけです。それでも往生は叶いますか」と。

六、上人の給わく。其の條勿論そなり、所詮決定心しんを生しやうぜば、往生すべき人なり。煩惱罪惡等の、往生を障さわらざるをば、凡夫の心ほんぶにては、覺知かくちすべからずといえども、本願に相応そうおうする程の念仏申したらんには、それを障さわ碍して、往生をさまざまぐる罪はあるべからず。

それに対して法然上人がお答えになりました。「それは勿論のことです。所詮は、必ず往生しようとの思いが起れば、その人は必ず往生する人なのです。煩惱や罪惡が往生の障さわになるかどうかということなどは、凡夫の心にわかるものではありません。しかしながら、阿弥陀さまの本願どおりにお念仏を称える限りは、それを遮さわつてまで往生を妨げられる罪などあろうはずはありません。

七、往生は念仏の信否しんぴによるべし。さらに罪惡の有無にはよるべからざるなり。すでに凡夫の往生をゆるす、なんぞ妄念の有無をきらうべきや。

往生はお念仏の功德を信ずるか否かに関わるのです。決して、罪惡の有る無しに関わるものではありません。阿弥陀さまは、そもそも凡夫の往生を許されているのですから、どうして妄念の有る無しなどを問うことがありましょう。」